

2024年9月8日 説教「宣教の愚かさにより」

コリント人への手紙第一 1章 18～25節

今朝は会堂17周年記念礼拝です。使徒の働きではなく、第一コリントから学びます。会堂18年に向けての新しい一歩を、御言葉から教えられながら、踏みしめていきたいと願います。

1. 神の力であることば (18～20節)

①十字架のことば (18)「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちに、神の力です。」

「十字架のことば」の「ことば」のギリシャ語はロゴスであって、ヨハネ1:1と同じです。言葉ではなく「言」とも訳されます。その意味は、教えとか絶対的存在とかです。「十字架のことば」は神の力なのです。それは、救いを受けようとせず滅びに至る人々には愚かに思えても、救いを受ける者たちにとっては確かなことなのです。

②知恵を滅ぼし (19)「それはこう書いてあるからです。『わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。』」

18節の理由として、パウロはイザヤ書29:14を引用します。そこには「この民の知恵ある者の知恵は滅び、悟りある者の悟りは隠される」とありますが、神は人間から出るところの知恵は滅ぼすとありますが、かなり強い言葉です。また、神は人間の賢さというものもむなしくする、とありますが、全くそれを無視するというのです。

③この世の知恵を (20)「知者はどこにいますか。学者はどこにいますか。この世の議論家はどこにいますか。神はこの世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。」

「知者」「学者」「議論家」とありますが、律法学者が意識されているのでしょうか。あるいは、コリントの人々にあてた手紙ですから、ギリシャから出た、ソクラテス、プラトン、アリストテレスといった哲学者たちのことも念頭にあったかもしれません。しかし、パウロにとっては、どんなに優れた知恵者であっても、神はそうした知恵は退けられるというのです。

2. 神のみこころ (21～22節)

①神の知恵により (21a)「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。」

人間の知恵をふりしぼっても、神を知ることはできません。理屈からは神を知ることはできないのです。そのことは実をいえば、神御自身の知恵によるのです。人間の知恵からは、尊い神が十字架にかかるなどということは出てこないでしょう。人間は自分勝手に神の象を作りあげ、いかにもそれらしく奉ったとしても、それは人間の知恵に過ぎないのです。

②宣教のことばの愚かさ (21b)「それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。」



神がとられた道は、「宣教のことばの愚かさを通して」、人を救うものでした。つまり、宣教というのは時間もかかれば手間もかかります。どうして、神は圧倒的な力によって人を救う方法をとらなかったのでしょうか。神は宣教という手段をよしとされたのです。その愚かとも思われる方法で人を救いに導くことをよしとされたのです。

③ユダヤ人とギリシャ人 (22)「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシャ人は知恵を迫ります。」

ユダヤ人は出エジプトを体験した民です。分けられた海の道を通ってきた者たちです。ですから、ニコデモも「神がともにおられなければこのようなしるしは行なえません」と言いました。また弟子のトマスも復活のしるしを求めました。一方のギリシャ人は知恵や、あのアテネの民のように、耳新しいことを求めたのです。

3. 神の知恵としての十字架 (23～25 節)

①キリストを宣べ伝え (23)「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かですが、」

しかし、キリストにある者たちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えるというのです。申命記 21:23 には「木につるされた者は、神にのろわれた者だからである」とありますが、ユダヤ人にとって十字架につけられた人を救い主などとは思ってもよらず、つまずきでした。また、ケケロが「十字架という言葉は、耳から遠ざけるべきだ」と言ったとのことですが、異邦人にとっては軽蔑の対象でした。

②召された者達にとって (24)「しかし、ユダヤ人であってもギリシャ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。」

しかし、神に召されたクリスチャンにとって、キリストの十字架は、神からの力の源であり、神の知恵と確信させる出来事なのです。そのクリスチャンがユダヤ人であっても、ギリシャ人(異邦人)であっても全く変わらないことだということです。「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」(ローマ 1:16)とある通りです。

③神の愚かさと人の賢さ (25)「なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」

神が愚かであるはずはなく、弱いはずもありません。しかし、その言葉を使うとしても、その愚かさは、賢い人の賢さより賢く、その弱さは強い人の強さよりも強いのです。はっきりと言うならば、神と人間はその賢さや強さにおいて比べることはできないのです。

《結論》今朝の聖書箇所にはこのような背景がありました。つまり当時のコリント教会にはこのような問題があったのです。ある者は「パウロにつく」と言い、ある者はアポロに、ある者はケパ(ペテロ)にと分裂していました(1:12)。地上の教会は、コリント教会ばかりでなく、どの時代でも、どの地でも、分裂分派が起きる可能性があります。それは、クリスチャンも相変わらず罪人であり、教会でも自己主張が高じて、対立を生むことになるのです。

そんな地上の教会に対するメッセージとして、パウロはまずもって喝破しました。「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です」(18 節)。ここには福音の特徴があらわれています。十字架の福音は、クリスチャンにとって神からの力です。しかし、世の中の人々は極刑である十字架は、おぞましいものでした。そこで、十字架上で死んだキリストを崇めることなど思いもよりませんでした。しかし、クリスチャンにとってはキリストの十字架は他に代えられません。この十字架により、罪人が信仰告白に従って救われる道が開かれたのです。キリストを信じることによって救われる道です。私たちは、会堂 17 周年にあたり、改めてこの十字架の教えの上に立ち、キリストを共に見上げ、信仰を一つにして進んでいきましょう。

さて、キリストのからだである教会(エペソ 1:23)にとって不可欠なしるしは何ですか。それは主日礼拝をささげ、聖礼典を行っていくことです。それでは次に大切なことは何でしょうか。それは、キリストのご命令(マタイ 28:18～20)に従って、宣教をしていくことです。教会はどのような姿勢で宣教していけば良いのでしょうか。パウロは言います。「神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。」(21 節)。ここには「宣教の愚かさによって」とありますが、神は教会とそこに連なるクリスチャンが愚直に宣教する方法を示されたのです。罪深く、弱く、欠点の多い教会とクリスチャンを用いて、信じる者を救おうとされるということです。

それでは、宣教というのは、派手なことや、人々の興味を持つことをしていくことでしょうか。今秋、姉ヶ崎キリスト教会では久しぶりにチャペルコンサートを開催します。全盲の北田康広先生に音楽とメッセージをしていただきます。しかし、それを行うことが目的ではありません。キリストがこのような宣教を用いて、人を救おうとしてくださるようにと祈っていくことが大事です。人間の知恵で人は救われません。聖霊が働かれる時に人は救われるのです。

50 年も前に、私は母教会の長老に生意気に訴えたことがあります。「教会はもっと伝道しなければならぬではありませんか」。すると、その長老は「礼拝を心からささげること自体が伝道です」と応えられました。その長老が述べたことは正しかったと今では思います。なぜなら、主日礼拝がささげられていることは教会が活着していることの証明だからです。また、そこで祈り、賛美、御言葉の説き明かしがなされていることは、宣教でもあるからです。

会堂 17 周年を迎えて、私たちの教会はますます喜ばしい礼拝をささげてください。また、礼拝に基づきながら、パウロにならい、福音宣教を外部にもしていきましょう。イエス・キリストの福音のすばらしさを証ししていきましょう。